

題目：産業看護職の地域保健との連携コンピテンシーとその関連要因の検討

保健医療学専攻・看護学分野・公衆衛生看護学領域

氏名：三橋祐子

研究指導教員：荒木田美香子教授

キーワード：コンピテンシー，産業看護職，連携，地域保健，地域・職域連携

1. 研究の背景と目的

近年、人口の高齢化や女性の高齢出産等により介護や育児をしながら働く労働者が増加している。また、労働者自身が抱える健康問題は、生活習慣病やメンタルヘルス不調、発達障害など幅広く、感染症の問題も深刻である。よって、産業保健に携わる看護職（以下、産業看護職）は対象者の状況に応じて、幅広い世代、幅広い分野の保健対策に取り組んでいる地域保健と連携し、その社会資源を有効に活用する必要がある。しかし、地域保健と産業保健の実践者同志の連携には至っていない状況が見受けられる。筆者は先行研究において、産業看護職への聞き取り調査から地域保健との連携コンピテンシー（Competencies of Collaboration：以下、「CC」と略す）を明らかにした¹⁾。本研究は産業看護職の地域保健との連携やCCの実態とその要因を明らかにするとともに、CCを高める要因について検討することを目的とした。

2. 方法

本研究は、日本産業衛生学会員である産業看護職 2574 名を対象として自記式質問紙調査を実施した。調査項目は産業看護職の基本属性、連携の必要性に関する認識、連携経験の有無の他、先行研究¹⁾において抽出した4つの側面（日頃の取り組み、連携の実践、組織の理解を得るための取り組み、連携の基盤となる意識・姿勢・考え方）、合計 59 の CC 項目を用いた。分析方法として、4つの側面ごとにCCの妥当性を検証（項目分析・確認的因子分析・信頼性の検証）し、CCの全体構造についても同様に検証した。また、地域保健との連携経験の有無と基本情報（年代、資格、自治体保健師経験の有無、産業看護職としての経験年数等）、自己研鑽・学習経験等の有無、及び連携の必要性に関する認識について比較した（ χ^2 検定、Mann-Whitney の U 検定）。さらに、従属変数を連携経験の有無として多重ロジスティック回帰分析（変数増加法＜尤度比＞）を行った。4つのCCの経験状況等を見るために各側面毎に合計得点を算出した。基本情報および、自己研鑽・学習経験等の有無により2群に分け、Mann-Whitney の U 検定によって、CCの中央値を比較した。さらに、4つの側面毎の合計得点を従属変数とした重回帰分析（Stepwise 法）を行った。統計解析は IBM 社 SPSS statistics Ver.25. 及び、Amos Ver. 25.0 を使用し、有意水準を 5% とした。

3. 倫理的配慮

本研究の実施に関しては、東海大学健康科学部倫理委員会の承諾を得た（2016 年 11 月 10 日

第 16-05-1 号)。

4. 結果

815 名の回答が得られ (回収率 31.7%)、有効回答率は 92.8%であった。回答者の年代は 40 代が 36.4%と最も多く、保健師の資格を持つ者は 80.2%、現在の所属における経験年数は平均 12.5 年、産業看護職としての通算経験年数は平均 17.0 年、過去に自治体保健師としての勤務経験が有る者は 18.7%であった。また、連携の必要性を感じている者は 80.9%であったが、地域保健との連携経験がある者は 34.0%であった。連携経験者の特徴として、事業所規模 499 人以下が 31.1%と最も多く、嘱託産業医雇用の事業所は 48.2%と約半数を占め、産業看護職の配置人数も 1 人のみが 35.0%と最も多かった。また、連携経験者の 72.0%が地域保健主催の研修会や勉強会などへ参加しており、連携経験が無い者と比較し有意に高かった。CC の 4 つの側面毎に適合度を分析した結果、いずれも GFI=0.96 以上を示した。また、CC の 4 つの側面をひと纏まりとした場合も適合度は GFI=0.849 であった。「組織の理解を得るための取り組み」に関する CC の中央値が最も低く全体的に最低点に近い得点に分布が偏っていたが、CC に最も強く寄与していた。背景要因である「地域保健主催の研修会や勉強会などへ参加」は、CC の 4 つの側面のうち「日頃の取り組み」、「連携の実践」、「組織の理解を得るための取り組み」の 3 つと有意な関係性が認められた。また、「ロールモデルとなるような産業看護職の存在」についても、「連携の実践」、「組織の理解を得るための取り組み」、「連携の基盤となる意識・姿勢・考え方」と有意な関係性が認められた。

5. 考察

産業看護職が地域保健と連携している割合は 34%と低く、地域保健との連携が活発に行われているとは言えない現状が明らかになった。連携経験者は産業看護職一人配置、嘱託産業医の雇用という職場環境であったことから、産業保健活動におけるマンパワー不足を補い、情報収集や自己啓発の機会としても地域保健との連携に取り組んでいる可能性が考えられた。「組織の理解を得るための取り組み」に関する CC 中央値が最も低かったが、CC に最も強く寄与しており、組織の理解を得ることは、地域保健との連携を実施する上で重要な要素でありながら、取り組むことが難しい CC である可能性が考えられた。また、CC の関連要因は、地域保健主催の研修会や勉強会などへ参加経験、ロールモデルの存在、産業医の雇用状況等であった。CC を高めるには、地域保健関係者との顔の見える関係づくりができる機会を増やすこと、ロールモデルとなる産業看護職を増やすこと、産業保健活動の展開において産業看護職自ら連携の必要性を判断し実践することが重要である。

6. 結語

本研究により産業看護職による地域保健との連携と CC の実態が明らかになり、組織の理解を得ることの重要性や困難性が明らかになった。また、CC の関連要因は、地域保健主催の研修会や勉強会などへ参加経験、ロールモデルとなるような産業看護職の存在等であり、CC を高めるには地域保健関係者との顔の見える関係づくりができる機会を増やすこと、ロールモデルとなる産業看護職を増やすこと等が重要である。このような CC を高める要因が明らかになったことは新規性が高い。尚、本研究は JSPS 科研費 JP15K11867 (基盤研究 C) の助成を受けて実施した。引用文献: 1) 三橋祐子, 錦戸典子. 地域保健との連携における産業看護職の連携コンピテンシーに関する検討. 日本産業衛生学雑誌. 2017;59(4):95-106